

平成 22 年 5 月 14 日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）

研究期間：2008～2009

課題番号：20830031

研究課題名（和文） 米国における教師教育論の到達点と課題

研究課題名（英文） Study on the research on teacher education in America

研究代表者

八田幸恵（HATTA Sachie）

福井大学・教育地域科学部・講師

研究者番号：60513299

研究成果の概要（和文）：近年世界的に高等教育の「質保証」の動きが高まり、「教員養成スタンダード」の策定が重要な課題となっている。本研究では、アメリカにおけるリー・ショーマンの教師の「知識基礎」および「教育的推論と行為」に関する研究を歴史的に後付け包括的に検討することによって、専門職としての教師の知識と学習過程をモデル化する際の論点と、それに対するショーマンの回答を導き出した。それは以下の3点である。第一に、教師の知識は学習過程と切り離して考えることはできないという点である。専門職としての教師の知識は学習過程と不可分の形で定義されるべきであり、また、学習過程を充実させる知識のあり方を考える必要がある。第二に、教師に特有であり、教育実践の中で使用することができる形にまで翻案された知識を成文化し、共有することに取り組む必要があるという点である。しかしながら第三に、教師に特有な知識を共有する必要はあるものの、それをある基準のもとで精選し明確にすることよりも、より広い世界に公的に開かれていることに意味があるという点である。

研究成果の概要（英文）：As worldwide movement, the reform for the standard-based teacher education is proceeding. In America, Lee S. Shulman's theories of teachers' knowledge and learning process have been used for structuring standards for teachers. This study reviewed Shulman's works and showed his comprehensive idea. The three important points came out.

Firstly, teachers' knowledge and learning process are very closely connected. So we should define knowledge base for teachers in connection with their learning process. Secondary, we should transform different knowledge needed for teachers to the special form to be used in teaching and share them. Thirdly, however, we must accomplish it not by selecting special knowledge under the certain criteria but by opening and publishing them to the broader world.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	680,000	204,000	884,000
2009年度	1,010,000	303,000	1,313,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,690,000	507,000	2,197,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学

キーワード：米国、教師スタンダード、教師の専門性と専門職性、アカウンタビリティ、学習する専門職コミュニティ

1. 研究開始当初の背景

戦後日本の教員養成は、「大学における教員養成」と免許状の「開放制」を二大原則とし、学問を十分に学ぶことによる教員養成、いわゆる「アカデミズム」を基本としてきた。これらは、戦前の「師範学校における教員養成」を「閉鎖制」・「プロフェッショナルリズム」と呼び、否定した上で成立したものである。「開放制＝アカデミズム」に対する「閉鎖制＝プロフェッショナルリズム」という構図は、戦後日本の教師教育論を考える上での座標軸となってきた。

しかし、1990年代に入り教育現場の困難から実践的指導力を求めて教員養成を行おうとする機運が高まり、2007年には「今後の教員養成・制度の在り方について（答申）」が出され、「学校と大学との連携」を軸とした教師教育という方針が示された。これによって、「開放制＝アカデミズム」対「閉鎖制＝プロフェッショナルリズム」という座標軸は変更を余儀なくされたものの、一方で、この座標軸が含んでいた学問的知識と実践的知識およびそれらと人格との関係、学問的知識と実践的知識の生産主体や生産過程といった個々の論点が、より密な関係をもって問われるようになった。教師の知識・思考・学習過程を意味づける枠組みが必要となってきたのである。

ところで、教育のグローバル化と高度職業人養成という課題を受けて、近年世界的に高等教育の質保証の動きが高まっている。そして質保証の方法として、従来の教育政策に見られたようなインプット（教育内容）の管理・統制ではなく、ラーニング・アウトカム（身に付けた能力）の評価という方法が用いられるようになってきている。教職課程に関しても、質的水準の向上のため、養成段階で最終

的に身に付けさせる「資質能力」を明確にして到達目標化すること（「教員養成スタンダード」の策定）が求められている。しかしながら、「教員養成スタンダード」については、策定が始まった当初から、「マニュアル対応の教師を生み、必ずしも自律的な教師の力量を高める手だてとして有効に作用していない部分が多い」という指摘がなされている。

このような状況において、諸外国の教師スタンダード（standards for teachers）が参照され、検討されている。中でもアメリカの教師スタンダードは注目を集めている。というのもアメリカには、養成段階、免許取得段階、そして現職教育段階それぞれに関する国家的なスタンダードが存在し、しかもそれらが連動することによって、一貫したスタンダードに支えられたアカウンタビリティ・システムが構築されつつあるからである。

我が国においても、教師の知識・思考・学習過程を意味づける理論的枠組みを整備し、自立的な力量を高める手立てとして有効に作用する教師スタンダードを構築していくことが、喫緊の課題となっている。

2. 研究の目的

アメリカの教師スタンダードは、主に1980年代から展開している、教師の知識や思考に関する研究の蓄積に基づいている。一連の研究の中でも、最も言及されるのが、リー・ショーマン（Lee S., Shulman）の教師の「知識基礎（knowledge base）」、および教師の学習過程である「教育的推論と行為（pedagogical reasoning and action）」に関する研究である。

ショーマンは、教師の「知識基礎」の重要な一部として、pedagogical content knowledge（以下 PCK と略す）という概念

を提唱したことで知られる。PCK とは一般的に、「内容に関する知識 (content)」と「教育方法に関する知識 (pedagogy)」の「特別な混合物 (the special amalgam)」と定義され、各教科領域の教師に特有な知識とされている。ショーマンが PCK 概念を提起した 1985 年以降、アメリカでは、各教科領域においてその内実を検討する取り組みが推進されている。そして、全米的なスタンダードの中に PCK が位置づけられるようになってきている。日本においても、ショーマンの PCK 概念やその後のアメリカにおける PCK 研究の発展は、教師の「教育内容に関する知識」が実践に与える影響に関する研究や、教科領域に特徴的な教師の知識を追究する研究において参照されている。

また一方で、ショーマンの理論は PCK を含む教師の「知識基礎」に関する研究よりむしろ、教師の学習過程の研究として参照されてきた。ショーマンが提唱した教師の学習過程である「教育的推論と行為」モデルは、日々の教育実践の創造と省察の過程として紹介され、「省察」による知識の形成を主張した理論として検討されてきた。そして、学校での協働実践と校内研究に埋め込まれた教師の学習過程の研究としても紹介されてきた。

このように複数のアプローチから先行研究が行われているものの、ショーマンの所論を仔細に検討すると、「知識基礎」と学習過程の研究が一貫して密接な結び付きをもって論じられてきたことがわかる。そして、教師の知識と学習過程のモデル化に関して豊富な示唆を与えるものであることがわかる。そこで本研究では、ショーマンの所論の展開を跡付けていくことで、教師の知識・思考・学習過程のモデル化に関わる論点とそれに対するショーマンの考えを明らかにすることを目的とした。

### 3. 研究の方法

ショーマンにおける知識と学習過程に関する理論に関わる論文を歴史的な資料として年代順に整理し、それらの資料群から、1990 年代以降に欧米の認知科学において進行した能力観・学習観の転換と観連づけて、ショーマンの理論の展開を跡付けていった。

### 4. 研究成果

本研究においては、専門職としての教師の知識と学習過程をモデル化する際の論点と、それに関するショーマンの考えを浮き彫りになった。特に重要なものとして、次の点を指摘する。第一に、ショーマンは、教師の知識は学習過程と切り離して考えることはできないと考えている点である。彼は常に、専門職としての教師の学習過程の分析から、それを支える知識のあり方を探究してきた。し

たがって第二に、教育実践の中で使用されるように翻案された知識 (pedagogical content knowledge) を成文化し共有することに取り組んできた点である。しかしながら第三に、教師に特有な知識を精選し明確にするというよりも、教師に特有な知識をより広い世界に公的に開いていくことに意味があると考えられるようになった点である。

以上から、自律的な教師の力量を高める手立てとして「教員養成スタンダード」を機能させる際の示唆を示しておく。現在日本で策定されつつある「教員養成スタンダード」は、教師にのみ必要であり到達すべき知識・能力を列挙し、それを下位項目へと分析するという手法を取っている。このような手法は、結果的に直線的な学習過程を導く危険性がある。目標分析は学習過程の分析とともに行われる必要がある。その際、学習過程を公的で共同的なものとしてモデル化とすることで、学習者は単に分析された知識・能力を保障される客体ではなく、教職という専門職共同体に参加するなかで自身の知識・能力を表明する主体となることができるだろう。しかしながら現在は、教師が公教育を担い手として信頼を回復すると同時に、他の専門職と協働し大きな構想のもとで公教育を構築していくことが求められている。教師にのみ必要な知識を特定することは教職共同体外部に対する説明責任を一定程度果たすことになるものの、一方でそれを他の専門職も理解可能なように開き、教育実践に関する議論により多くの参加を促すことも必要である。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

① 八田幸恵 (2009) 「国語科の学力評価 (1) 一近年の学力テストにおける「読解リテラシー」観の検討を通して一」『福井大学教育地域科学部紀要第 IV 部教育科学』第 64 巻、95-109 頁

② 遠藤貴広・中村保和・八田幸恵・廣澤愛子・柳澤昌一 (2009) 「教員養成課程初年次における課題探究型授業の展開一福井大学教育地域科学部『教育実践研究』に関する協働研究 (1) 一」『福井大学教育実践研究』第 33 巻、11-22 頁

③ 八田幸恵 (2009) 「リー・ショーマンにおける教師の知識と学習過程に関する理論の展開」『教育方法学研究』第 35 巻、71-81 頁

④ 八田幸恵・遠藤貴広 (2010) 「福井大学「教員養成スタンダード」の策定に向けて」『教師に必要な能力の定義・選択とその記述・評価の方法に関する研究一福井大学「教員養成スタンダード」の策定に向けて一 (践的な教

師教育研究拠点の基盤形成 平成 21 年度福井大学教育地域科学部学部重点研究 研究成果報告書 研究代表者 八田幸恵)』1-11 頁

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 3 件)

- ①八田幸恵 (2009)「松崎運之助と夜間中学—仲間と語り合いながら文字を学ぶ学校—」田中耕治編著『時代を拓いた教師たちⅡ—実践から教育を問い直す—』日本標準
- ②八田幸恵(2009)「Ⅷ 学習指導要領の変遷」田中耕治編著『よくわかる教育課程』ミネルヴァ書房
- ③田慧生・田中耕治編、高峽執行主編(2009)『21 世紀的日本教育改革—中日学者的視点—』教育科学出版社(中華人民共和国)

〔産業財産権〕

○出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

八田幸恵 (HATTA Sachie)  
福井大学・教育地域科学部・講師  
研究者番号：60513299

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3) 連携研究者 ( )

研究者番号：